富山県俳句連盟会報

第 101 号

令和七年十二月一日発行
富山市安住町二―一四
〒930―0094　電話 〇七六―四四五―三四三
振替番号　金沢　五―一七一〇八
北日本新聞社編集局内
富山県俳句連盟

第七十四回　富山県芸術祭主催
第二十九回　富山県民芸術文化祭参加

秋季俳句大会

木下　晶先生の講演を聴く

富山県芸術祭主催並びに富山県民芸術文化祭参加の秋季俳句大会は十月四日（土）午後一時から、北日本新聞ホールにて、八十八名の参加を得、川井城子幹事の司会により開催。中坪達哉会長は、まず創立五十周年記念俳句大会及び祝賀会への謝辞を述べた。その後続いて「七月の城端での吟行俳句大会、本日配布した合同句集第五十集を発刊し、新たな一歩を歩み始めた。昨今、時代の変化はめまぐるしく、とりわけ情報通信分野の激変に伴い、言葉の発信の仕方も大きく変わり、日本語のありようにも多大な影響を与えている。だからこそ、美しい日本語の調べで成り立っている俳句文明を大切していかなければならない。俳句は生活文化そのものであり美しく豊かで、厳しくもある富山の自然をアピールしていきたい」と挨拶。

（挨拶の中坪達哉会長）

続いて、富山県歌人連盟副会長、木下晶先生を講師に迎え、「不易と流行をめぐって～俳諧から俳句へそして世界文学へ」の演題で、江戸時代から明治時代にわたる日本短詩型文学の近代化をはじめ、海外への俳句の広がり等について、豊富な知見を基に分かりやすく講演いただいた。（講演要旨は別掲）

小憩後、俳句大会に入る。出句数は五百十句（二五五名）。連盟役員によって選考された特選句、入賞句を森純子幹事、室井千鶴子幹事が披講。

そのあと森川敬三幹事、田上眞知子理事、宇波可津志理事、宮﨑あつ子理事、杉本恵子理事が講評。

引き続き表彰式に移り、楠浩介北日本新聞社生活文化部長より北日本新聞社賞、中坪達哉会長より連盟賞がそれぞれに贈呈された。（成績は別掲）

中島平太事務局長が閉会の辞を述べ大会は成功裡に終了。尚、当日連盟合同句集（第五十集）を配布した。

◇連盟創立五十周年記念祝賀会御芳志
金　二万円　匿名

連盟夏季吟行会
南砺市クリエイタープラザ「桜クリエ」

七月二十一日（日）夏季吟行会を開催。南砺市城端、南砺市クリエイタープラザ「桜クリエ」を会場に、城端別院善徳寺、城端界隈及び桜ヶ池等を吟行。参加役員が選句を行った。出句は百十四句、参加者五十七名。

天　位
悠久の伽藍をつつむ夏木立　中島　平太
地　位
虫干のものに山門設計図　石川　彰子
人　位
扁額に残る金色門涼し　浅野　義信

富山県現代俳句協会
秋季吟行俳句大会

九月二十八日（日）滑川市民交流プラザで開催。ほたるいかミュージアムや宿場町回廊めぐり、芭蕉句碑、海遠望等を吟行。参加者は四十一名、出句数八十句（二句投句）、一人五句選。

天　位
街道を行きつ戻りつ秋茜　西　和美
地　位
鐘楼へ妻の背を押す萩の風　坂田　直彦
人　位
天高し地球が丸く見える風呂　芹田きみ子

令和八年度
総会・俳句大会（予告）
日　時　令和八年六月六日（土）
　　十三時～十六時
会　場　北日本新聞ホール
講　師　「岳」編集長
　　小林　貴子先生

令和八年度
夏季吟行俳句大会（予告）
期　日　令和八年七月十九日（日）
会　場　富山市八尾町

秋季俳句大会作品集

◇連盟選者特選句

義　信選　遠雷は母の小言にどこか似る　藤井　詩耕
かづを選　秋天へ娘の乗る機影送り出す　布本美知子
冬　青選　復興の夏空ブルーインパルス　石灰　潤子
可津志選　どの顔もかつて村の子墓参　二俣れい子
こうき選　放し飼ふやうに小鳥来厨窓　岡田　康裕
喜　子選　解体の地響き咲き継ぐ百日紅　西田　広子
康　裕選　群とんぼ牧草刈りの音の中　金山美恵子
芙　美選　乱心の一歩手前の熱帯夜　川井　城子
城　子選　原爆忌握つて潰すペットボトル　北村加代子
弥　生選　語り継ぐ子等のまなざし原爆忌　川西　悦子
秀　子選　鎮魂の白に始まる揚花火　稲田　節子
美智子選　露草や峠越えれば風変はる　神田　邦子
洋　子選　トラックの七夕短冊を落とす　栃原百合子
直　彦選　朝顔の数に始まる子の日記　升田　義次
一　子選　妻と手をつなぎたくなる風の盆　八尾とおる
重　之選　内定あり母へ感謝の薔薇一本　高橋せつ子
桂　子選　露草や峠越えれば風変はる　神田　邦子
恵　子選　ふるさとの訛に戻る踊の輪　二口わこう
昭　夫選　のうぜんの風に明るき通し土間　森野　稔
　勇　選　箒目に一日始まる暑のカイニョ　寺田　嶺子
せつ子選　桃すするこの世まだまだ捨てがたき　神田　邦子
眞知子選　箒目に一日始まる暑のカイニョ　寺田　嶺子
寿　山選　卒寿今秘め事吐きし終戦日　西村　久栄
平　太選　結納の謡ひと節夏座敷　二口わこう
広　美選　野良着みな夫のYシャツ茄子の花　青木　章子
達　哉選　ピッケルに結はへて下るビール缶　内田　慧
睦　子選　どの顔もかつて村の子墓参　二俣れい子
美知子選　うつかりも玉子小さきも酷暑ゆゑ　横山ゆうこ
多佳子選　はやばやと仏飯下げる暑気つづき　木下　晶
真智子選　沙羅の花落ちてはじまる水の旅　寺田　恭子
幸　子選　原爆忌戦なき世を子と祈り　丸田美恵子
あつ子選　ポケットに故人の名刺虫干せり　馬瀬　和子
千鶴子選　ゼリー喰むたび初めてと言ふ母よ　高田　勇
純　子選　自転車の空気満タン夏休　跡治　順子
敬　三選　夜の秋メールに小さき感嘆符　谷　順子
　稔　選　トラックの七夕短冊を落とす　栃原百合子
とおる選　終戦忌父の遺骨は母のもの　稗苗　良二

◇入賞句

天　位　18点
どの顔もかつて村の子墓参　二俣れい子
地　位　10点（特選１）
野良着みな夫のYシャツ茄子の花　青木　章子
人　位　10点（特選なし）
いつよりか子に支へられ吾亦紅　山西　澄子
四　位　9点
山荘のカレー大盛り雲の峰　石黒　順子
鎮魂の白に始まる揚花火　稲田　節子
生身魂よく食べよく寝よく笑ふ　畑中あづき
五　位　8点
遠雷は母の小言にどこか似る　藤井　詩耕
めだか飼ひ自由研究始まりぬ　吉野　恭子
六　位　7点
早起きは生きる喜び青田風　成瀬　輝代
戦なき八〇年や遠花火　五十里眞紀
妻と手をつなぎたくなる風の盆　八尾とおる
山寺の夜明けを告ぐる蝉の声　鶴松　陽子
七　位　6点
口ぐちに猛暑を嘆き席につく　小幡富貴子
手花火に服喪のひとを誘ひけり　室井千鶴子
立山よりの水の巡りて稲は穂に　池嵜みき子
露草や峠越えれば風変はる　神田　邦子
着馴れたる普段着涼し家涼し　水野　元雄
割烹着は昭和の白さ母の日よ　石田　英子
八　位　5点
足三里手三里揉んで夕端居　新村美那子
踏んばらねば死にそうになる残暑かな　大﨑　寛子
飛石でつながる新居あかとんぼ　西野津奈子
原爆忌握つて潰すペットボトル　北村加代子
帰省子の髪を束ねて水仕する　杉本　恵子
先客の供花に供花たす墓参　金山美恵子
羅の寺僧は風のやうに去る　村田　悦子
胸に置くラジオの時報広島忌　久﨑富美子
九　位　4点（特選あり）
沙羅の花落ちてはじまる水の旅　寺田　恭子
ピッケルに結はへて下るビール缶　内田　慧

※ 得点数が同じ場合は特選数の多い方を上位とする。

「越の讃歌」（山）高点上位入賞作品

立山の水を盥に瓜冷やす　中島　平太
雑魚寝して見上ぐる立山の星月夜　馬瀬　和子
山の気の澄みて色濃き夏あざみ　新村美那子
山貫きし偉業や虹の黒部ダム　田中　憲子
借景は立山連峰夏料理　升田　義次
青嶺濃し周年祝ふ剣舞かな　四宮　一子
絵解きめく案内板や登山口　高木　昭夫
みくりが池青嶺映してなほ青し　河西　悦子
立山の豊かな恵み神の滝　小幡富貴子
立山よりの水奔放に立夏かな　森　純子
朝夕の立山美しと帰省の子　澤田　敏江
山の田を継ぎて節くれ豊の秋　髙井　富子
登山靴履きてときめく八十路かな　角田　睦子
雲海を抜けて雄山の列につく　宇波可津志
ごちさうは山の湧き水冷さうめん　下野マサ子
トロッコの警笛ぬける青葉山　石川　彰子
赤とんぼ二上山に句碑いくつ　土田　由朗

富山県現代俳句協会
定期総会・春季俳句大会（予告）
日　時　二〇二六年三月二十九日（日）
　　開会　十三時
会　場　富山県教育文化会館　一階　集会室

講演要旨

不易と流行をめぐって

～俳諧から俳句へそして世界文学へ～

富山県歌人連盟副会長
木下 晶

高校生の頃、松尾芭蕉の「不易流行」の言葉にふれ、芸術の本質に立脚するとともに絶えざる変革をめざす姿勢に深く感銘し、自らの信条としてきました。

江戸時代末から、海外との文化交流が生まれた中で、古今の文芸書を渉猟し、自ら獺祭書屋主人を号した正岡子規は、日本の短詩型文学の本質を追及し、西洋化、近代化でもたらされた文芸思潮を取り入れ変革をめざしました。

俳句が世界最短の詩であることの意義をハーバードスペンサーの主張から援用し、美術用語のｓｋｅｔｃｈの訳語「写生」をもとに、リアリズム、アイデアリズムなどの概念を取り入れるなど、近代俳句を方向づけました。

一方、明治時代初期には、日本の俳句や短歌は、西洋では「詩」と捉えられていませんでした。西洋詩は短くてもソネットの十四行詩で、韻律を重ねる長大さ重厚さ、思想の統一などが必要とされ、専門家が創作するものだったからです。

そうした時代に、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、オープンマインドのもと、日本の俳句・俳諧、短歌・和歌について、詩形などとともに、題材や文芸的背景を、作品ごとに丁寧に解説し、多くの人に感銘を与えました。こうした紹介が多言語で訳され、世界各国にハイクが知られていきました。

欧米で詩人として認められた野口米次郎は、一九一四年にロンドンで出版した〝ＴＨＥ ＳＰＩＲＩＴ ＯＦ ＪＡＰＡＮＥＳＥ ＰＯＥＴ〟『日本の詩の精神』で、俳句は作者によっては完成せず、読者が完成する文学としました。寺田寅彦も「俳諧は読者を共同作者とする」とのフランス人の言葉を引用し、俳句作品の成立要因としています。（「俳諧の本質的課題」）これらは、芭蕉「言いおほせて何かある」が示すように、余情の本質を端的に示したものと思います。

作者と読者の共感によって創り出される日本の短詩型文学の独自性は、エイゼンシュテインら世界の多くの文芸人に肯定的に受けとめられ、世界的普及の足掛かりとなりました。

鈴木大拙の弟子で、戦前、金沢四高で教えたレジナルド・Ｈ・ブライスは、太平洋戦争下の日本収容所で『英文学および東洋古典における禅』や『俳句』を執筆しました。これらの著作が、戦後の米国で、ビート詩人らのハイク創作のきっかけとなりました。「禅」に象徴される自己中心主義からの離脱や、自然との親和性も広く受け入れられてゆきました。

戦後の米国では、コロンビア大学教授で入門書や指導書を執筆してハイクブームを起こしたハロルドＧヘンダーソンが「英語ハイクの父」、パーデュー大学教授のサンフォード・ゴールドステインが「英語タンカの父」と呼ばれています。

その理由としては、二度の世界大戦を経て、多くの知識人が、声高な思想に疑念を抱き、人間の呟きをそのまま表現し、記憶できる日本の短詩型文学の特性が注目されたことがあるのでしょう。専門家でなくても、誰もが自らの言葉や心を発信できる短詩型文学は、世界の人々に詩表現の自由をもたらしたと言えます。

欧米の小学校教育では、東洋や日本を学ぶ際の教材としてハイクが紹介され、子どもらに創作させています。

長年にわたり日本の俳句の理解と普及に当たった多くの方々のおかげで、今やハイクは詩の一分野として認知され、世界中で広く親しまれています。

海外では3行詩をハイクとし、5行詩をタンカとするなどルーツである日本の俳句と短歌をリスペクトしていただいています。日本の短詩型文学への理解や共感は、まさに国際的交流や協力の基盤だと考えます。

文化交流は双方向です。異文化に敬意をもって接するのが日本人の望ましい態度とすれば、日本から世界に広がった短詩型文学については、特別に敬意を払うべきでしょう。

今後とも、オープンマインドのもと、文化交流を深め、新たな不易流行を期待したいと考えます。

(公)俳人協会富山県支部俳句大会

九月二十三日（火・秋分の日）富山電気ビルにて開催。俳人協会副会長、「河」同人会長小島健先生を講師に迎え、「俳句の力」と題して講演を聞く。投句数二百一句、会員六十七名で三句投句。

講師特選

竹切って竹山肥す秋燕忌　浜谷　栄子
まつり帯娘をくるくると廻し解く　杉本　恵子
稲雀誰も叱らぬ日の暮れる　日出嶋雅美
風の盆道が踊ってゐるごとし　浅尾　京子
露草や優しく嘘をつく介護　高橋せつ子

☆互選高点句

一　位
露草や優しく嘘をつく介護　高橋せつ子

二　位
草の実や今出来る事ひとつづつ　荒田眞智子

三　位
風の盆道が踊ってゐるごとし　浅尾　京子

◇受　賞

○(公)俳人協会主催第64回全国俳句大会

「一般の部」

大会賞

遊び足りたる春泥の靴ならぶ　小嶋トシコ

秀逸賞

千本のアキレス腱が山車を曳く　荒田眞智子

選者特選句

上田日差子選

手を洗ふ水の重さよ花疲れ　脇坂琉美子

しなだしん選

囀や小枝で混ぜる梅昆布茶　杉本　恵子

西山　睦選

千本のアキレス腱が山車を曳く　荒田眞智子

横澤　放川選

虫出しの雷に降り立つ家郷かな　中坪　達哉

応募総数　一万一千三百二十二句

中坪達哉会長は選者を務めた。

「ジュニアの部」

大会賞（十一句）

妹がわらって歩く入学式　高岡市立五位小学校　三年　末森亜佳莉

もらったよトロフィーみたいなたけのこを　高岡市立五位小学校　五年　柴垣里衣紗

応募総数　一万四百二十八句

学校賞　高岡市立伏木小学校

奨励賞　高岡市立五位小学校

○富山県功労賞（団体）

富山県俳句連盟　11月

○富山県芸術文化協会　感謝状

荒木かづを　11月

消　息

令和七年度「辛夷」年次俳句大会

十月十三日（月・スポーツの日）富山県民会館にて開催。参加者約六十名。

「辛夷」三賞受賞者（年間賞）

辛　夷　賞　大谷こうき
寺田　嶺子
衆山皆響賞　倉沢　由美
橋本しげこ

「辛夷」年次俳句大会

中坪達哉主宰選

天　位
箱庭の中で叶へる夢もあり　田村ゆり子（鎌倉）

第53回砺波市文化祭俳句大会

十月十一日（土）砺波市文化会館にて開催。投句百九十二句。投句者六十四名。四十五名参加。

講師

中坪達哉県俳句連盟会長　選

天　位
天高くタンクに落つる籾の香と　島田　一徳

地　位
油染みし付録のレシピ秋なすび　二俣れい子
今年米いきれのままに積まれたり　川田　五市

人　位
塩飴の袋からっぽ秋旱　飯田　静子
分け入りて稲穂のうねり腰を打つ　藤井　哲尾
鯛やけふの区切りの畝を立て　大谷こうき

川井城子県俳句連盟幹事　選

天　位
朝まだき南無から下へ墓洗ふ　沖田　泰子

地　位
まだまだと老いの出役籾運び　藤井　雅晴
お捻りのとんで来そうな菊人形　八田　幸子

人　位
貯蓄庫を拭き上げて待つ今年米　平木美枝子
遺影にも見せて聞かせて秋祭り　野村　邦翠
「太った」と告げて帰省子去りにけり　斉藤　孝臣

○アフタヌーン俳句会

北日本新聞カルチャーパーク高岡の講座「アフタヌーン俳句会」が、十月十八日(土)射水神社にて、田井三重子講師と受講生十名、招待者二名それぞれが短冊にしたためた自作の句を神前で朗詠した。

金色の雲の沈みて神の留守　田井三重子
神の留守とろみある酒含む兄　京井　淑子

◇句集出版紹介

「連峰」第十九号　みのり俳句会　令7・3
「若芽句集」第八集　若芽句会　令7・8
「ＶＩＴＡクラブ俳句教室会員句集」　令7・8
創立五十周年記念県俳句連盟合同句集　令7・10

◇訃　報

県俳句連盟前監事　大久保置箔氏

令和七年七月二十九日、ご逝去。

謹んで哀悼の意を表します。

編集後記

連盟会報101号をここにお届け致します。次回102号は令和八年七月一日発行予定です。会報に関する記事等があれば原稿用紙に記入の上、左記に送付下さい。

（郵送又はＦＡＸのみ）
〒九三二―〇二一一　南砺市井波一四八五―二六
高　田　　勇
ＦＡＸ・ＴＥＬ（〇七六三）八二―二九〇八